

荒川流域における縄文時代中期の小規模集落についての検討

松浦 誠（自然の博物館）

はじめに

縄文時代の集落の中には、竪穴住居址が非常に多く発見される「大規模集落」と呼ばれる集落が存在する。大規模集落は、検出される遺構や遺物が多いことなどから、研究の対象とされることが多く、縄文時代集落研究は、この大規模集落を中心におこなわれてきたと言っても過言ではない。

一方で、大規模集落が存在する同時期・同地域において、住居址が数軒程度の集落が存在している。

このような集落は「小規模集落」と呼ばれ、大規模集落とは反対にこれまでの研究において取り上げられることは少なかった。しかし後述するが、現在その評価が見直され、小規

模集落を積極的に検討する動きが高まっている。

本論においては、そのような状況を踏まえ、荒川とその支流における縄文時代中期の小規模集落の特徴を、大規模集落との対比という形で検討・提示していきたい。

1、大規模集落と小規模集落

住居が多数発見されるいわゆる大規模集落は、特に縄文時代中期に多くみられる。この集落はまた、竪穴住居群が環状に並ぶことが多いため「環状集落」とも呼ばれ、研究史上においてはむしろこちらの呼び名の方が古い（和島 1948）。さらに「大規模集落」「環状集落」には、「拠点集落」という呼び名も

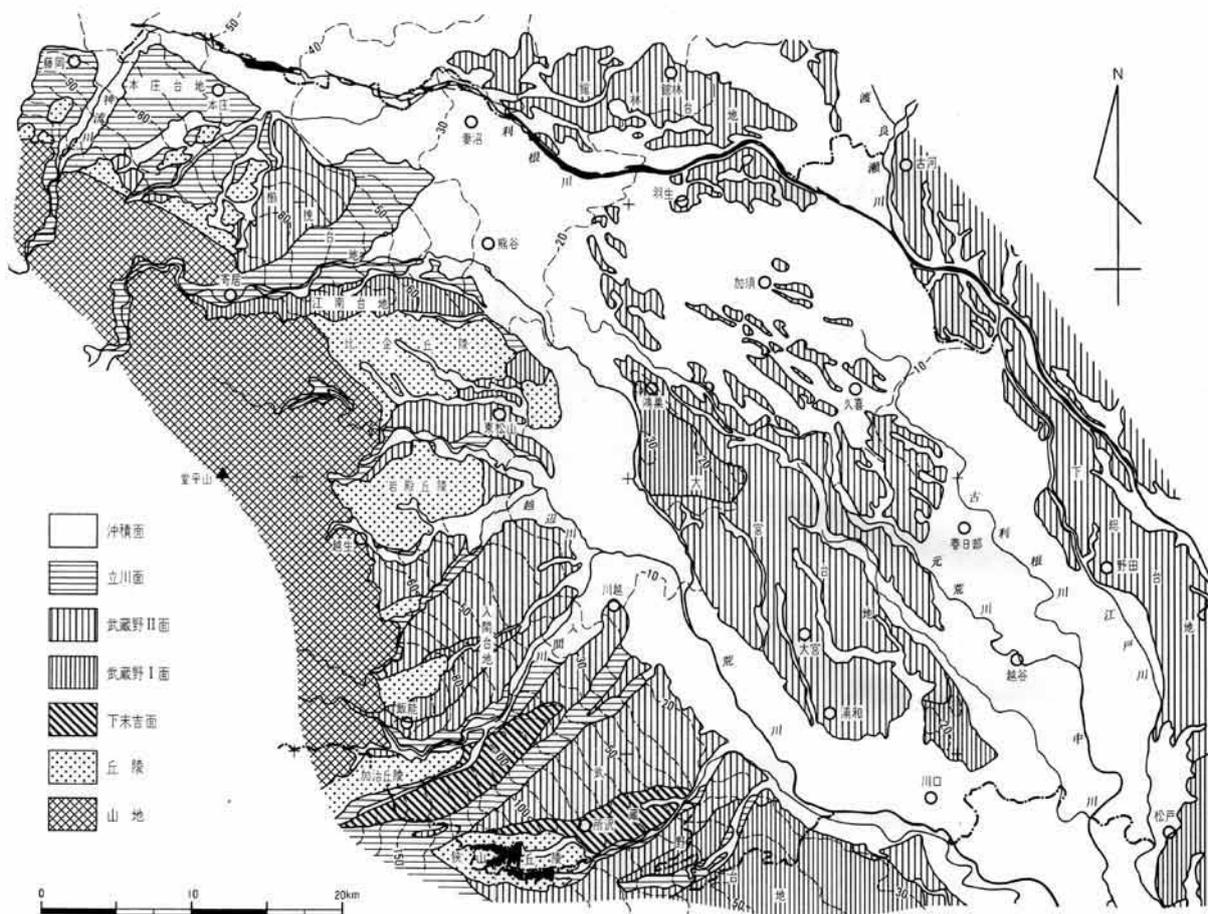


図1 埼玉の地形図（堀口 1986）

ある。これは、大規模集落がそこを拠点として狩猟や採集に出掛けたり、亡くなった人の埋葬の場となるなど、ある一定範囲の地域で暮らす人々の生活や信仰の中心として機能していたという考え方によるものである（小林達 1986）。

つまり、大規模集落には、

- ① 規模を重視する「大規模集落」
- ② 形状を重視する「環状集落」
- ③ 機能を重視する「拠点集落」

という3つの呼び名があり、同じ集落であっても何を重視するかによって研究者の呼び方は異なっている。ただ、「拠点集落」は、ほかの集落と比べて住居址数が多いことや、住居址群を環状につくるといった計画性が見られることが、集落の拠点性の理由としてしばしばあげられ、大規模・環状を包括した考え方をされることが多い（谷口 2005）。

一方の小規模集落は、縄文時代を通してみられ、その数は実は大規模集落よりも多い（鈴木保 1986）。小規模集落が研究の対象にされにくいのは、前述したように遺構や遺物の数が少ないことが大きい。また、研究史上において、小規模集落は拠点である大規模集落に付属する集落である、あるいは狩猟・採集に出た人々の出先の集落など、消極的な評価がなされてきたことも要因に挙げられる。

つまり小規模集落は、大規模集落と比べ、

- ① 規模から見れば「小規模集落」
- ② 機能から見れば「周辺集落」

という評価を与えられてきた。

しかし近年、小規模集落を再評価しようとする動きが現れている。それは、大規模集落は小規模集落の累積した姿ではないかという説が提唱されたからである（土井 1988、黒尾 1988）。これは、大規模集落は長い時間をかけて形成されたものであり、短い時間枠、すなわち細分化された土器型式の一時期に当てはめて見れば、その住居址数は小規模集落とかわらないのではないかという問題提起である。現在の縄文時代集落研究は、集落の短期的な景観を追及するものと、長期的な住居址の累積の結果である景観を重視するものに2分されている。先述した大規模集落の評価（大規模・環状・拠点）は、まさに長期的な景観を重視する研究者の考え方であり、

短期的な景観を重視する研究者達は、大規模集落を小規模集落と同一とみるのである。

以上のように、現在の大規模集落と小規模集落の評価は、研究者によって分かれるが、その検討方法は、短期的な景観においては、土器や住居の廃絶順などから集落の一時期の規模を検討するものが（小林謙 1995、黒尾 2001）、長期的な景観においては、集落遺跡の一定地域における立地状況や住居以外の遺構などから集落の機能を検討するものが主流である（谷口 2005、鈴木保 2006）。

一方で、大規模集落では環状化するという形状的な特徴が指摘されるのに対して、小規模集落においては、住居址の配置という形状の問題が取り上げられることはほとんどない。

確かに、長期的にみれば大規模集落と小規模集落は、規模や住居址の配置が同一とはいえないが、前述したように、短期的にみれば、両者は同一の規模であった可能性がある。であるならば、形状、すなわち住居の配置においても、実は両者は同一なのではないか。言い換えれば、小規模集落も住居址が累積すれば、環状化するのではないか。そのような疑問を解決するためには、「形状」という観点からも両者の集落を比較するべきである。

また、集落の規模や形状は、地理的な要因に影響を受ける可能性がある。つまり、集落のつくられた台地が非常に狭ければ、集落は小規模にならざるを得ない。さらに、集落間の距離も、小規模集落が大規模集落に対して一定の距離を持って存在しているのかなど、両者の集落の関係性、機能を考えるうえで重要である。集落の置かれた環境、周辺遺跡との距離等を含めた「立地」も比較の必要がある。

そして、集落はこれまで述べてきたように長期的なもの、短期的なものというように、その存続期間に差がある。つまり同じ10軒の住居址が見られる集落であっても、100年で10軒か、10年で10軒かでは、一時期の住居址数に差があるとともに、土地の活用の仕方に大きな違いがある。そういった意味で、存続した期間、すなわち「時期」も重要な比較対象であるといえる。

つまり大規模集落と小規模集落の比較は

- ① 「規模」（最終的・短期的な住居址の数）

- ② 「形状」(最終的・短期的な住居址の配置)
- ③ 「機能」(遺構・遺物の種類・数)
- ④ 「立地」(地理的環境・多集落との距離)
- ⑤ 「時期」(存続期間)

の5つの点から行うべきではないか。

こうした視点から、本論においては、特に着眼されにくい「形状」に注目して、大規模集落と小規模集落の比較を行いたい。

次章においては、荒川流域の縄文時代の遺跡を概観していく。

2、荒川流域における縄文時代集落

荒川は、秩父山地を源流とし、入間川・新河岸川を加えて、東京湾へと流れ込む、埼玉の中央を流れる川である。荒川沿いには櫛引台地・江南台地・大宮台地、その支流の入間川沿いには東松山台地・入間台地、新河岸川沿いには武蔵野台地など多数の台地が見られる(図1)。荒川をはじめとした河川は、農地を広げるための瀬替えや洪水を防ぐための改修作業によって、以前の姿をとどめてはいない。しかし、集落のつくられる台地と川の流れる低地は、おおよそ10万年前に形作られており、川と台地の関係は、現在の環境からも読み解くことが可能であるといえる(貝塚ほか 2000)。

鈴木敏明氏によれば、荒川本流域における縄文時代の遺跡は、確認されているだけで1373遺跡に上り、中でも中期は495遺跡と群を抜いて多い(表1:鈴木敏 1987)。地域別にみると、大宮・川口などの埼玉県東南部に遺跡が集中するほか、県北西部の寄居や秩父周辺も遺跡数が多くみられる。逆に県中央部には遺跡数が少ない傾向が見て取れる。

このような状況は、大宮台地・江南台地などの台地のある地域に縄文時代の遺跡が多く残され、低地においては遺跡が少ないと考えることもできるが、遺跡の多い地域は発掘調査の機会に恵まれた地域である可能性は否めない。また、20年以上前のデータであるため現状とは即していない部分もあるが、いずれにしても、荒川流域の台地上には縄文時代中期の遺跡が多く存在していることに変わりはない。

このように資料として量的に多い、荒川およびその支流流域における中期の遺跡をとりあ

表1 荒川流域遺跡数(鈴木敏 1987)

市町村名	先土器	早期	前期	中期	後期	晩期	不詳	合計
大荒	0	0	1	5	0	0	3	9
滝村	0	0	4	8	2	1	8	23
川市	2	2	4	22	8	2	14	54
父町	0	4	9	28	8	0	2	51
野町	0	9	11	18	2	0	1	41
寄居	0	7	12	46	12	1	6	84
花川	0	0	0	0	0	0	8	8
江本	0	0	0	0	0	0	11	11
南村	0	0	0	0	0	0	5	5
谷市	0	0	0	2	0	0	1	3
上北	0	0	0	0	0	0	1	1
吹市	0	1	1	2	0	0	6	10
鴻本	3	13	12	32	6	3	7	76
北市	4	12	9	30	11	4	7	76
桶市	4	9	8	51	19	2	4	97
大市	17	72	65	115	74	6	33	382
与市	2	0	2	6	2	0	0	12
浦市	0	13	16	12	17	2	0	60
川市	2	30	20	59	62	11	3	187
戸市	0	0	0	0	0	0	0	0
巖市	0	0	0	0	0	0	0	0
大市	0	0	0	1	0	0	3	4
滑市	0	0	0	0	0	0	4	4
吉見	0	0	0	1	0	0	0	1
東市	0	0	0	0	0	0	22	22
川島	0	0	0	0	0	0	0	0
坂市	0	0	0	6	1	0	2	9
上越	0	4	7	13	2	0	4	30
富岡	0	2	12	13	3	0	4	34
志市	0	0	0	1	0	0	27	28
朝市	0	0	1	4	0	0	1	6
和光	0	2	5	13	2	1	4	27
和光	0	2	3	7	3	0	3	18
合計	34	182	201	495	234	33	194	1,373

げて、縄文時代の大規模集落と小規模集落の比較を行っていきたい。そのなかで今回は、特に大規模集落と小規模集落の形状の比較を目的とするため、その集落の全容が確認できる遺跡を検討の対象とし、集落の立地と出土遺構の種類、時期などからその特徴を概観していく。

・行司免遺跡(嵐山町、図2)

入間川の支流、都幾川から500mほどの台地上に立地する。遺構は縄文時代中期中葉の勝坂I式期から後期初頭の称名寺式期にかけての住居址261軒、土壇9基、集積土坑131基、土器捨て場2カ所が確認されている。住居址数は全国でも随一であり、比企地方においての拠点的集落として評されることが多い。

・中沢遺跡(ふじみ野市、図3)

武蔵野台地の端、ふじみ野市内の勝瀬原遺跡群に属する。遺跡の南側4mほど下には新河岸川支流のさかい川が流れる。遺構は、住居址79軒、土壇169基、集石土坑28基などが確認され、中期後葉の加曾利E1~加曾利E4式期までに属するとみられる。さかい川右

岸には同じ中期の集落である西ノ原遺跡などが立地している。

・亀居遺跡（ふじみ野市、図4）

武蔵野台地の北東部に位置し、荒川へと流れ込む福岡江川の源流点の源流点に近接する台地上に形成されている。遺構は阿玉台Ⅰb～勝坂Ⅱ式期と中期前葉が大半を占め、住居址12軒、土壙83、集石土坑149などが確認されている。福岡江川流域には、対岸の江川南遺跡をはじめ、亀居遺跡と同時期の遺跡が多数みられる。

・志久遺跡（伊那町、図5）

多くの河川が流れる大宮台地上において、綾瀬川から派生した小河川沿いの段丘上に位置する。中期の遺構は、住居址10軒、土壙10基が確認され、加曽利E3～加曽利E4式期の中期後葉に属する。

・後山北谷遺跡（飯能市、図6）

入間川の支流成木川を眼下におく台地上に位置する。確認された遺構は、住居址7軒、土壙3基で、中期前葉の猪沢式期から中葉遺跡の北側斜面には、同遺跡から廃・投棄された土器など勝坂Ⅱ式期に属する。どの包蔵地とみられる芝口ヲネ遺跡が、東に約200mの同じ台地上には滝尾塚遺跡がある。

・お伊勢山遺跡（所沢市、図7）

入間川流域の狭山丘陵上、北方に張り出す台地に位置する。中期の遺構は、住居址が5軒、また、時期不明の落とし穴状遺構が多数確認されている。時期は、中期前葉の猪沢から中葉の勝坂Ⅱ式期までに属する。

以上、荒川流域の縄文時代中期の集落について、立地や住居址の数などに触れてみてきた。

規模の面からいえば、261軒・79軒の行司免遺跡・中沢遺跡は大規模であり、7軒・5軒と少ない後山北谷遺跡・お伊勢山遺跡は小規模といえよう。住居址13軒の亀居遺跡や10軒の志久遺跡は、その中間の集落である。

遺構の数・種類から見れば、行司免遺跡は集積土坑が非常に多いが土壙は少なく、中沢

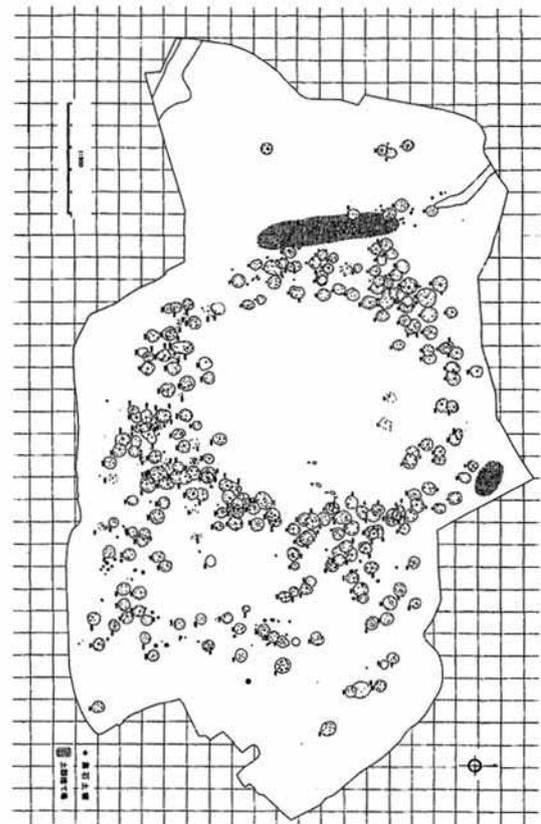


図2 行司免遺跡（渡辺 2001）

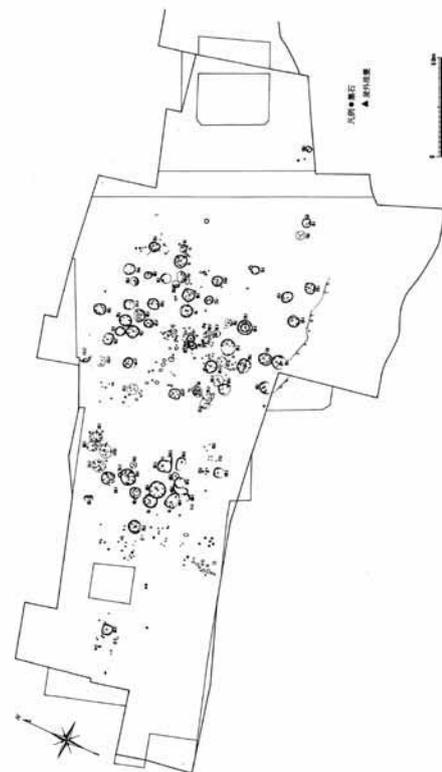


図3 中沢遺跡（早坂ほか 1999）

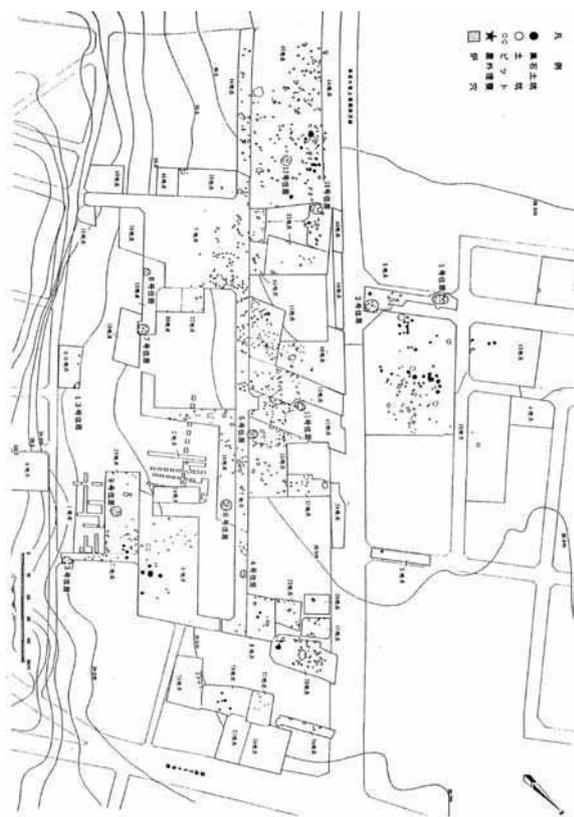


図4 亀居遺跡(坪田ほか 1998)

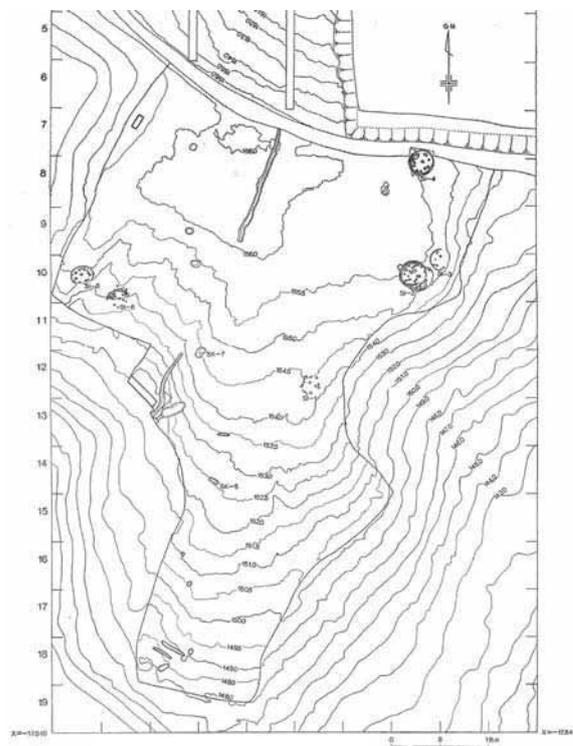


図6 後山北谷遺跡(剣持 1986 一部改編)



図5 志久遺跡(笹森ほか 1976 一部改編)

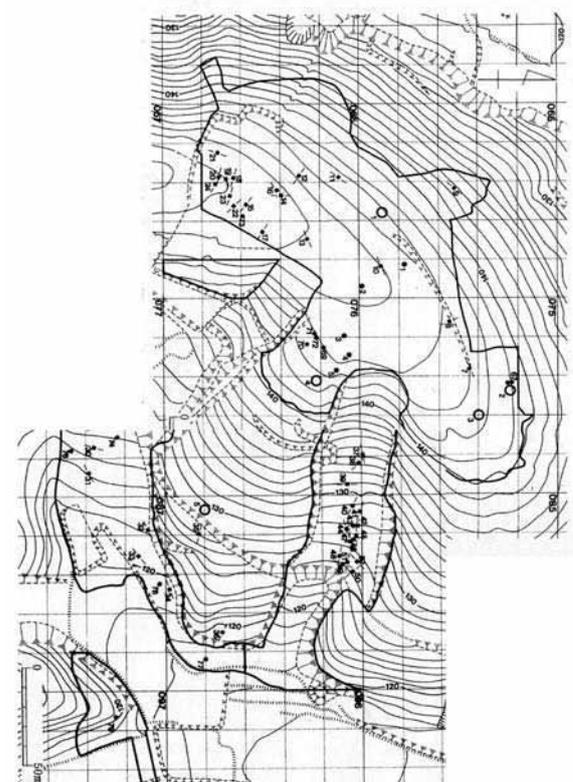


図7 お伊勢山遺跡(西蓮寺ほか 1989)

遺跡はその反対の傾向を示す。亀居遺跡が住居址に対して、土坑・集積土坑ともに非常に多いのは注目すべき点であろう。また、小規模集落においても、土壙がみられる点も重要である。

立地の面においては、小規模集落のある台地上はそれほど広くなく、大規模集落のある台地上は非常に広い。当然のことながら、集落の規模の差は、台地の広さという地形の制約の問題が関係するだろう。一方で、亀居遺跡は広さの上で制約はないように見受けられるが、住居址数は決して多くない。集落の規模は、台地の広さのみの問題ではないと考えられる。

3、小規模集落の形状について

すでに述べたように、住居址数の多い大規模集落は、住居址群が環状化している様子が見て取れるが、少ない小規模集落ではその様子が確認できない。しかし、大規模集落と小規模集落の集落形成初期において、両者の形状を比較すると、両者は類似した形状をしていることが理解できる。以下、その分析結果を示すが、住居址の時期は報告書の記載と炉体土器、埋甕、床面直上出土土器等から判断した、横切りの編年以前の形式を用いた。

大規模集落である行司免遺跡の集落形成初期においては、勝坂 I 式期の住居址15軒が中央を空けるように配置しており（図8）、一時期においても住居址の数は多い。一方、同じ大規模集落の中沢遺跡は、加曾利 E 式期の住居址が三角形状に3（4）軒見られるだけである（図9）。このような集落初期において3軒程度の住居址が三角形状に集落中央をさけて存在する傾向は、大規模ではない亀居遺跡（図10）、後山北谷遺跡（図12）にも見られ、お伊勢山遺跡にもその可能性が見て取れる（図13）。

これらはまさに、小規模集落が集落の形成初期においては、大規模集落と同様の住居配置をしていたことに他ならない。つまり、小規模集落もさらに住居址が累積していけば、環状集落になると考えられるのである。

小規模集落が環状化するという事は、縄文時代中期の集落は、実は普遍的に環状化する可能性が提起される。また、なぜ集落が環

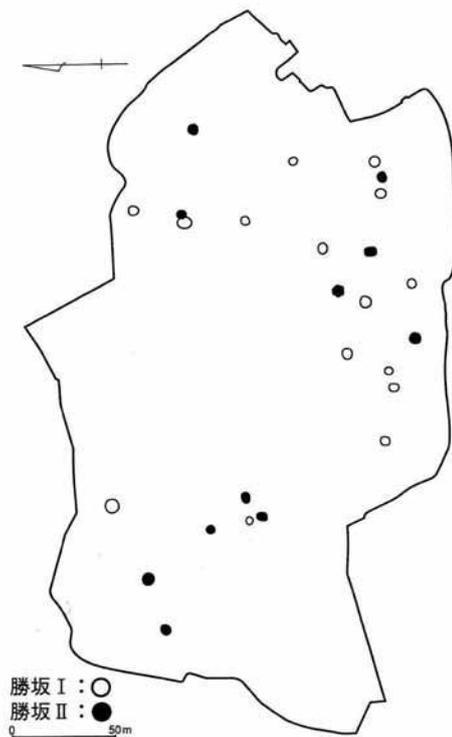


図8 行司免遺跡 勝坂 I 式期集落
(渡辺 2001)

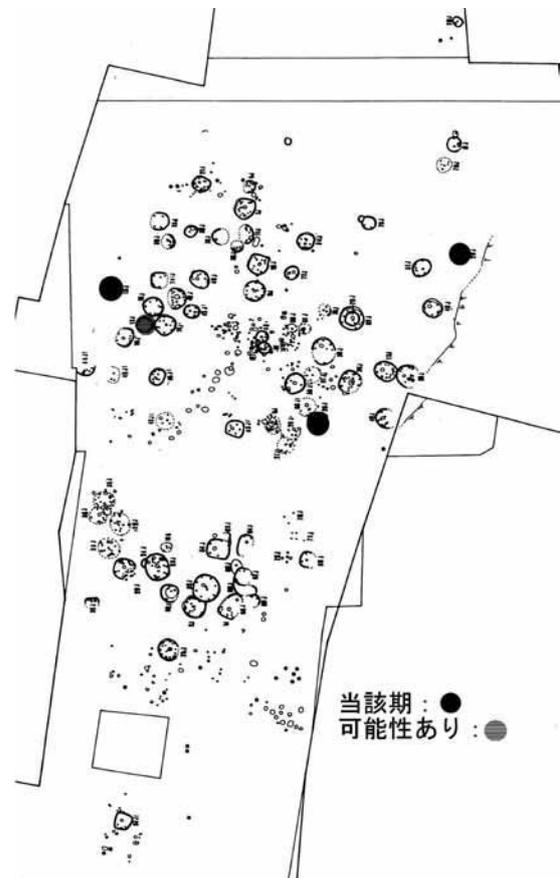


図9 中沢遺跡 加曾利 E 1 式期集落
(早坂ほか 1999 一部改編)

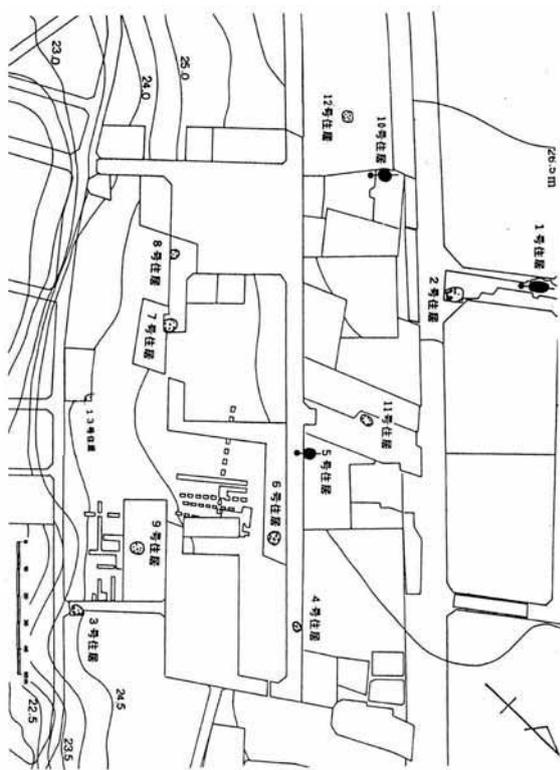


図10 亀居遺跡 貉沢式期集落 (坪田 1998)

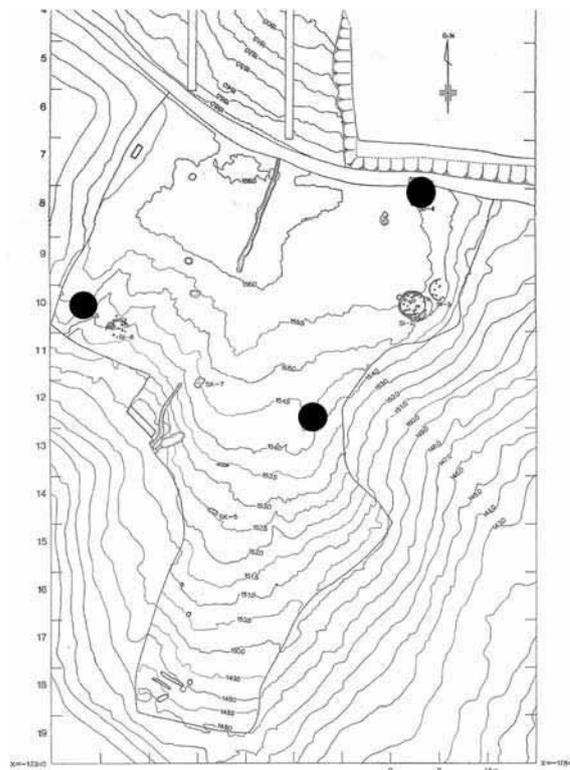


図12 後山北谷遺跡 勝坂 式期集落 (剣持 1986 一部改編)

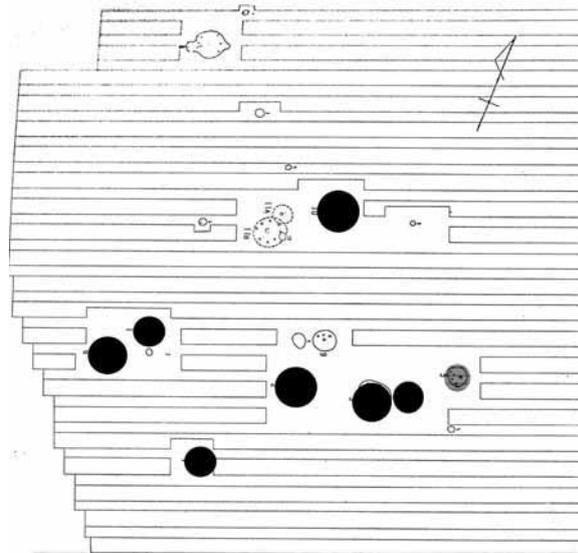


図11 志久遺跡 加曾利E3式期集落 (笹森ほか 1976 一部改編)

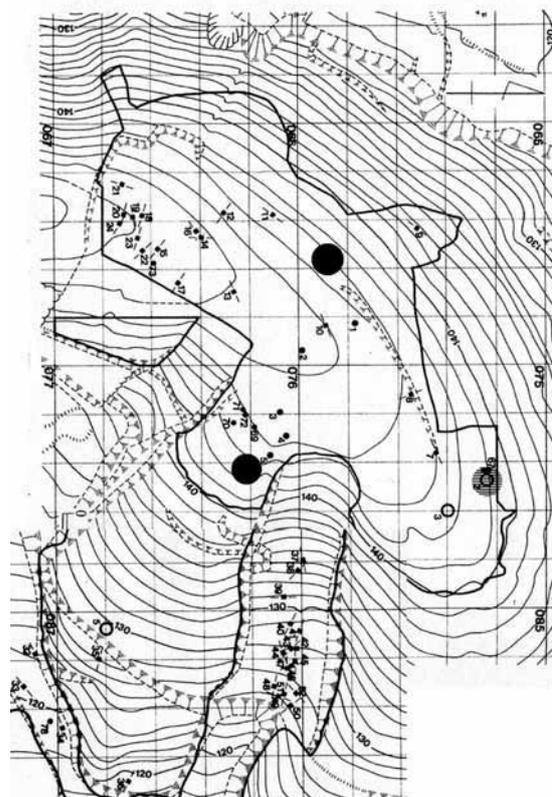


図13 お伊勢山遺跡 勝坂 式期集落 (西蓮寺ほか 1989 一部改編)

状化するのかわかるための手がかりとなることを期待する。

今回の検討では、集落の細分に既存の土器型式を使用したため、一時期とした住居址は同時存在ではない可能性がある。だが、同じ時間枠の中で比較した結果、複数の集落が同じような住居配置を示したことは、その配置になんらかの共通性があると考えられる。より細かい検討は、今後の課題といえる。

おわりに

荒川流域の縄文時代中期における大規模集落と小規模集落の比較を、簡単ではあるが試みた。結果として、小規模集落は形状としては大規模集落とかわらず環状化するのではないかという結論に至った。今後は、分析の事例を増やし、小規模集落の環状化という問題点に対して、より明解な答えを導き出したい。

また一方で、行司免遺跡のような大規模集落と小規模集落は規模の上において明らかな差があることは事実である。そのような差が何を起因に起きているかを検討することが今後の課題となる。

このような課題を持ちながらも、小規模集落を検討していくことが、縄文時代の集落研究を進めるうえで、もはや不可欠な時期に来ているといえるだろう。

参考文献

- 植木 弘 1988 『行司免遺跡』嵐山遺跡調査会
 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編 2000 『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版
 黒尾和久 1988 「縄文中期の居住形態」『歴史評論』No.454
 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』縄文中期集落研究グループ
 黒尾和久 2001 「集落研究における『時』の問題－住居の重複・廃絶と同時存在住居の把握方法に関連させて－」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
 小林謙一 1995 「住居跡のライフサイクル

- と一時的集落景観の復元」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』
 小林達雄 1980 「縄文時代の集落」『国史学』第110・111号
 小林達雄 1986 「原始集落」『岩波講座日本考古学』4（集落と祭祀）
 剣持和夫ほか 1986 『中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヨネ・後山北谷・滝夫塚』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 西蓮寺健ほか 1989 『お伊勢山遺跡の調査 第3部 縄文時代』早稲田大学所沢校地文化財調査室
 笹森健一ほか 1976 『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会
 鈴木敏昭 1987 「荒川流域の原始遺跡」『荒川総合調査報告書 2 荒川 人文 I』埼玉県
 鈴木保彦 2006 『縄文時代の集落』雄山閣
 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社
 坪田幹男ほか 1998 『亀居遺跡』埼玉県大井町遺跡調査会
 土井義夫 1988 「『セトルメントパターン』の再検討」『史館』第20号
 中村倉司 2009 『平成21年度特別展図録 埼玉圏の原始・古代人－ひとの動きをモノから探る－』埼玉県立川の博物館
 早坂廣人ほか 1999 「中沢遺跡」『勝瀬原遺跡群』埼玉県ふじみ野市遺跡調査会
 堀口万吉 1986 「II 埼玉県の自然と地質」『新編 埼玉県史 別編 3 自然』埼玉県
 渡辺清志 2002 「埼玉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会